

新しく始まった予防接種

時期や間隔 効果的に/同時でも副作用増えず

松山市・上田小児科 上田 晴雄

2008年以降、次々と新しいワクチンが実用化され、11年にロタウイルス、12年には不活化ポリオワクチン、四種混合ワクチンが実用化されました。

ロタウイルスは冬に流行し、嘔吐(おうと)下痢症を引き起こします。推定ですが、このウイルスが原因で年間約80万人が医療機関を受診し、約7万8千人が入院しています。また、脳炎・脳症を起こすことがあり、年間数人ですが死亡例もあります。

このワクチンはロタウイルスによる下痢を約70%、点滴や入院が必要な重症下痢症を85~98%予防できると言われています。任意接種でお金はかかりますが、効果を考えると接種することを勧めます。

接種は生後6週から可能ですが、生後2ヵ月にヒブ、肺炎球菌ワクチンと同時に接種することを勧めています。これはお母さんの抗体がなくなる6ヵ月までに、最も早くかつ確実に、必要な予防接種のすべてを済ませることができるからです。

ロタウイルス以外にもヒブ、肺炎球菌、三種もしくは後述する四種混合、BCGを推奨されている接種間隔ですべて済ませようとすると、同時接種するしかありません。日本以外のほとんどの国では予防接種は同時接種されており、それによる副作用の増加はないようです。また、このワクチンは米国では腸重積の副作用が最も起こりにくい生後15週までに接種することが推奨されています。

不活化ポリオワクチンは、昨年9月から導入されました。このワクチンは生ポリオワクチンの副作用であるワクチンによるまひの発症がありません。生ポリオワクチンを1回も受けてない場合、3回の初回接種(20日から56日の間隔)と1回の追加接種(初回接種から12~18ヵ月後)、1回受けている場合は、2回の初回接種と1回の追加接種が必要です。生ポリオワクチンを2回受けている場合は接種する必要はありません。

昨年11月から四種混合ワクチンが接種できるようになりました。これは従来の三種混合(百日ぜき、破傷風、ジフテリア)に不活化ポリオワクチンを加えた予防接種です。従って、四種混合を接種した場合は不活化ポリオワクチンの接種は必要ありません。ただし、一部の地域では四種混合の供給が不足しており、推奨されている時期(生後3ヵ月)にできない場合は三種混合と不活化ポリオワクチンを接種することで代用しています。これは乳児が百日ぜきにかかると重症化するためです。

接種スケジュールについてはかかりつけ医と相談してください。

愛媛新聞「健康ファイル」

平成25年3月12日(火)掲載